

Future Beauty: 30 Years of Japanese Fashion



Barbican Art Gallery © Lyndon Douglas

ロンドン会場

会期：2010年10月15日～2011年2月6日

会場：バービカン・アート・ギャラリー

主催：バービカン・アート・ギャラリー

公益財団法人京都服飾文化研究財団

キュレーション：ケイト・ブッシュ（バービカン・アート・ギャラリー）

深井晃子（公益財団法人京都服飾文化研究財団）

ミュンヘン会場

会期：2011年3月4日～6月19日

会場：ハウス・デア・クンスト

主催：ハウス・デア・クンスト

公益財団法人京都服飾文化研究財団

キュレーション：クリス・デルコン（ハウス・デア・クンスト）

深井晃子（公益財団法人京都服飾文化研究財団）

概要

1970年代の高田賢三や三宅一生らの活躍に導かれて、1980年代、川久保玲や山本耀司らが登場し、世界の目を「日本ファッション」に引き付けました。平面性、素材の重視、無彩色など、その独自性のある表現は、西欧的な文脈に捉われないまったく新しい美意識でした。

「日本ファッション」は西欧的な美意識の絶対性への再考を促しました。言い換えれば西欧的美意識の解体、再構築が起こったのです。ちょうど社会がポストモダンへと移行するプロセスで、「日本ファッション」が語る新しいランゲージが注視されたのです。それが、21世紀ファッションを新たな地平へと踏み込ませる牽引力となったこと、西欧文化以外の文脈から世界性を持つ服を発信できることを示したこと、いいかえればグローバル化する新たな世紀へと扇動していたことも、既に今は誰の目にも明らかでしょう。つまり「日本ファッション」は、21世紀の社会の、そしてファッションの方向を示唆するものでした。それは「Future Beauty」と呼ぶべき美意識であり、衣服革命だったのです。

現在も新しい世代のデザイナーが加わり、日本ファッションは、世界でしっかりとした地位を持ち続けています。またそれが、日本の伝統文化の上に立つ、とりわけ1970年代以降の「日本ファッション」が積み上げた力の上に成り立つものであることも、忘れてはならないでしょう。

本展は、20世紀後期から今日までの日本ファッションの魅力の全貌を改めて照射するものとなりました。



Haus der Kunst © Dirk Eisel

出展内容（ロンドン会場）

衣装：	126 点
写真：	6 点
プリント・マテリアル：	152 点
映像：	45 点
合計：	433 点

「日本ファッション」を特徴づける「陰翳礼讃」、「平面性」、「不易流行」、「クール・ジャパン」の4セクションは、マネキンを使った静的な衣装展示、加えて、畠山直哉氏による写真、出展作家のコレクション・ショーの映像等で構成。

同時に、三宅一生、川久保玲、山本耀司ら、「日本ファッション」を初期から力強く牽引してきたデザイナーの人間性と創造性に迫るインタビュー映像、さらには、DM、パンフレット、コレクションの招待状、書籍等のプリント・マテリアルにより「日本ファッション」が伝えた創造の概念と、それが創り出した前衛的なイメージを重層的に展示。アート／デザイン／ファッションの境界を大きく揺さぶったこれらのプリント・マテリアルには、アーヴィング・ペン、横尾忠則、シンディ・シャーマン、アイ・ウェイウェイ等のアーティストが参加しています。

出展デザイナー（ブランド）

三宅一生、川久保玲（コム・デ・ギャルソン）、山本耀司、渡辺淳弥、高橋盾（アンダーカバー）、栗原たお（タオ・コム・デ・ギャルソン）、阿部千登勢（サカイ）、小野塚秋良（ズッカ）、大矢寛朗（Oh! Ya?）、勝井北斗＋八木奈央（ミントデザインズ）、丸龍文人（ガンリュウ）、坂部三樹郎、高島一精（ネ・ネット）、高田賢三（ケンゾー）、滝沢直己（イッセイ・ミヤケ）、立野浩二、津村耕佑（ファイナル・ホーム）、中章、廣川玉枝（ソマルタ）、堀内太郎、堀畑裕之＋関口真希子（まとふ）、皆川明（ミナ・ペルホネン）、森永邦彦（アンリアレイジ）
+J（ミュンヘン会場のみ）

写真

畠山直哉

展示デザイン（ロンドン会場、ミュンヘン会場）

藤本壮介（建築家）